
Diabolus historia

夢幻遊戲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Diabolus historia

【Zコード】

Z5778Z

【作者名】

夢幻遊戯

【あらすじ】

その人間は普通の高校生だった。だがとある事件が切っ掛けで人間と言うカテゴリーから逸脱してしまった。

これは、ある日突然非日常へと導かれた一人の少年の物語の一片：

…。

(前書き)

鉛色の雲に覆われた空。

地上に降り頻る雨が、乾いたアスファルトの地面を濡らしていく。暗雲に覆われた空では雷鳴が轟き、時折青い稲妻が地上へと落ちる。

古来より雷や火は神の力、怒りを表すとされてきている。今広大な青空を覆い、地上に雷を落とす光景はまるで神が世界に対し怒っているかのよう……。

とある高層建造物の屋上 ヘリポートが設けられた広い空間のその場所で、二人の男が踊っていた。

降り頻る雨に身体を打たれ、衣類は勿論その下にある身も濡れ冷え切つている身体で。両者はお互いに剣を振るい続けていた。

空間を絶え間なく奔り、風を切り裂く二つの刃。鉄の塊が正面から衝突し合い、刃を重ねる度に金属音を響かせ火花を激しく飛び散らす。

観客も誰もいない、雨に濡れた舞台でただ一人の役者は剣舞を演じる。

何十、何百と言つ斬り合いが繰り広げられ 千合目、遂に舞台に終幕が降りた……。

ふと目を覚ます。

青年は小さく欠伸をし、視線を周囲に向ける。等間隔に並べられた席、その席全てを埋める多くの人間が腰を下ろしている。ある中年男性は雑誌で顔を覆い大きな鼾を挿いて爆睡し、ある親子連れは窓の景色を見ながら楽しそうに談話している。カートを押したスチュワーデスが飲食物はどうかと言つ声掛けに対し丁重に断つた後、窓の方へと視線を向ける。

窓の向こう。青い空に白い雲、その中を今泳いでいる。

長らく離れていた出身国である日本に向けて航空する飛行機の中。その一席にてただ静かに日本へと到着するのを待つ。飛行してから、恐らく十時間程度と言つたところだろう。

四年ぶりになるのだろうか、日本の地に足を付けるのは。青年は思う。

生まれ育った国、他国からは平和ボケしている国だと言われている日本の地を離れて……今まで当たり前だと認識していた常識と別れを告げてからもう四年になるのか。

一般社会から、表の世界から掛け離れた生活。そこには平和と言う一文字は存在しない、あるのは恐怖と闘争……そして死という文字だ。

環境上仕方が無かつたと言えば仕方が無い。そういうのが日常茶飯事な世界であるし、何よりその世界に入る事を自ら望んだことなのだから。

一人ひとりにある運命の歯車。自分の場合、その歯車が大きく歪に狂つてしまつたことが全てを始まり。第三者にとつてこの運命の歯車の歪さを見れば、誰もが不幸としか思わないだろう。現に何人の人間に言わてきてている。

だが、これは全ては自分の意思によること。逃げる気もないし後

悔もない、寧ろ感謝しているぐらいだ。これが自分が進もうと魂に刻んだ道なのだ、と迷い無く断言出来る。

だが今は、その事は忘れていいようと思う。

多少の荒事はあるものの、それでも他国に比べれば平和……過ぎると言つても過言ではない国、日本に帰つて来たのだ。

今回日本へと帰つて来たのは表では“休暇という自身への御褒美”、裏では“飛び切りヤバい仕事”をする為コツチが本命だつたりする。

ここ最近“仕事”詰めで忙しかつた。たまには仕事のことを忘れてのんびりと羽根を伸ばし過ごすのも悪くは無い。

四年間アメリカで過ごし、長らく離れていた日本の地が恋しくなつたというのも理由の一つだ。日本語が久し振りに聞きたい、本場の日本食が食べたい……主に味噌汁を飲みたい等。やりたいことは沢山とある。

久し振りに踏む日本の大地、四年間程離れていた日本は……生まれ故郷はどう変わつているのだろう。或いは何も変わつていないのか。

……だが、休暇などはオマケ同然。本来の目的は誰の為でもない、自分自身がケリを着けなくてはならない事を成す為だ。

今でも忘れられない、あの日の出来事。全てが狂つた日、新たな人生の始まりの日、そして……絶対に成さなくてはならない事が出来てしまつた日。思えば四年間、それを成すが為に生きてきたのも同然だつた。

全ては、大切な友人の為に……。

「リヴィア

」

……あれは高校二年生となつたある日の事。

ウチのクラスの一人の転校生がやつて来た。イメージとしては異国のお姫様、と言つた所だろう。

リヴィア・ステイーガー、それが彼女の名前だ。

ブロンドの長髪に青い瞳、雪の様に白い肌。彼女は俗に言う外人で、つまりは留学生と言つやつだ。彼女はイギリス人で、前々から日本と言つ国に興味があり両親を説得させて遠路遙々日本にやつてきた、と一人の男子生徒の質問に対し答えた。

留学生……しかも飛び切りの美少女が自分たちのクラスに来た、と男子生徒達は興奮しながら騒ぎ 同じクラスの女子たちは男子たちを鬱陶しそうに見ていた。

そんな彼女は偶然にも俺の隣の空席に座ることになった。瞬間、男子生徒達の嫉妬の眼差しが一気に向けられる。

「よろしくお願ひします、えつと……」

「ああ。俺は龍翔、緋山龍翔だ。緋山でも龍翔でも好きな風に呼んでくれたらいい」

「では、緋山クンと呼ばせて下さい。私のことはリヴィアで構いません」

「ん、わかつた。まあよろしく」

これが彼女との最初の会話。特に変わったところはない、至つて普通の挨拶。

向けられていた男子生徒達からの嫉妬の視線の中に、今度は殺意までもが込められた。

たかが会話を交えたぐらいで睨まれることなど、生まれて初めての経験でもあった。

彼女は見た目だけでなく、中身も完璧だった。日本語は日本人並みに上手いことを始め勉強は勿論、スポーツも得意とする完璧さ。

更には趣味で武道を嗜んでいるとも言つていた。彼女に好意を持たれたい、という男子生徒達の下心から案内された道場では黒帯相手の女子生徒を一撃で斃してしまったという結果を見せつけ、周囲を唚然とさせた。

その現場を見ていた友人曰く、とてもじゃないが人間業とは思えなかつたらしい。

後日その女子生徒からは好敵手ライバルだと言われ、当の本人は友人が出

来たと喜んでいた。

男子生徒達が日々好意を持たれる為にあれやこれやとしている中、一人の女子学生に尋ねられる どうしてリヴィアの所にいかないのか、と。

その返答に、龍翔は興味が無いからとだけ答えた。

女時代に興味がない訳ではない、男として生まれた以上は……ましてや年頃である今異性に興味があるのが当たり前だ。ただ単に彼女

リヴィア・ステイーガーに興味がないだけだった。

確かに、彼女は勉強もスポーツも出来る美少女だろう。しかし龍翔自身リヴィアに対する感情はそれ以上なく、ただの美少女の留学生程度しか捉えていなかつた。

逆にどうしてそこまで彼女に夢中になるのかが理解出来なかつた。たかが美少女がこの学校に、同じクラスになつたぐらいでそこまで熱中するものなのだろうか。

しかし、いざれはこの熱も冷めるというものの、上野動物園に初めてパンダが来訪した時多くの観光客が訪れ賑わつたように、次第に彼女に対する興味も薄れていく筈だ。

意外だ、とその女子生徒は言つていた。

そんなある日、事態は急展開を迎える。

土曜日の深夜、寝付けずにいた龍翔は退屈凌ぎに近くのコンビニに行くことにした。小腹が空いていたこともあり、何か食べようと考えていた矢先 信じられない光景を目撃する。

コンビニに着く為の近道として利用する公園。深夜と言う時間帯であり公園には誰の姿も見当たらない。

だがそんな公園では一般常識と、現実とは大きく掛け離れた存在が待ち受けていた。

見た事もない二足歩行の怪物、そして黄金に装飾された一条の槍を手にその怪物と闘う一人の外国人の美少女、リヴィア・ステイーガーの姿だった……。

……科学の力が発展した現在、人々は古来より確かに存在していた者達のことを忘れてしまい、幻想の産物として認識してしまつてゐる。

だが、それらは実在しているのだ。

今あるゲームやファンタジー小説の多くに取り入れられている魔術や魔物、そして『神』と『惡魔』の存在も……常識に捕われた世界の裏側にある。

不意に機内にアナウンスが流れる。それはもうすぐ空港に着くと言つ内容であつた。

いよいよか、と外した視線をもう一度窓へと向ける。

見えてくる滑走路、大きな空港、そして日本……。

長年を費やし、遂に誓いを果たす時が訪れた。

そんな思いを胸に、静かに飛行機が着陸するのを待つ。

首先に提げていたアミコレットが羽織つているコートより顔を出します。

十一月十五日

季節は冬、今年は異常気象により十一月から真冬並みの寒さだつた。そして十一月に入つたことで、寒さは更に強くなり外を出歩く人の体温を容赦なく奪つていく。

体温を奪われないように、と厚着を纏うも吐息を一つすれば白くなつて視認出来る。それぐらい世界は寒かつた。

時刻は午後十時を過ぎた所。上を見上げれば鉛色の雲に覆われた空。その空から地上へと降るのは寒いながらも芸術的で神秘的な雪、ではなく冷たい雨。

雪ならばまだ雰囲氣的に許せたものの、雨と言つのは季節関係なく人を憂鬱とさせる。

そして現在の時刻も午後十一時過ぎ

次の日付に変わらう

としている。

「寒いな……」

息を吐ぐ。口から出た吐息は白くなり、降り頻る雨の中を溶ける
ように消える。

と、遠くから水を勢いよく跳ねる音が聞こえてくる。それは早く、
一定のリズムを刻みながら少しづつ大きくなつていく。誰か
が此方に近付いてくる。

「お、お待たせしました」

黄色のレインコートで身を包み、軽く息を切らす一人の少女。
「俺も今さっき来たばかりだ。気にすんなよ」

少女に龍翔は答える。

頭部をすっぽりと覆つていたフードの部分を取る。長くキレイな
ブロンドの髪に青い瞳、リヴィア・ステイーガーは呼吸を整えた後、
静かに口元を緩め優しい笑みを浮かべた。

「それじゃ、行きましょうか」

「ああ」

これがデートだつたらどれだけよかつたか、言葉には出さず龍翔
は心の中で思う。

言動だけを見れば誰もが逢引としか認識しないだろう。しかし、
これから先に待っているのはそんな優しいものではない。

向かう場所は目の前に聳え立つ廃墟と化したビル。そしてこのビル
の中でこれから行われることは……血生臭い、命を賭けた殺し合
いだ。龍翔は纏っていたワイン色のレザーコートを靡かせ、左手に
携えていた一振りの日本刀の柄に手を伸ばす。

リヴィアは纏っていたレインコートを脱ぎ去り、修道女シスターが纏う修
道着を思わせる青と黄色の衣装の袖口から身の丈を超える黄金に装
飾された長槍を表す。

仕事の時間だ。龍翔は不敵な笑みを作ると、逸る気持ちで廃墟の中へと足を踏み入れた。

リヴィア・ステイーガーは悪魔や魔物と言つた人外絡みの事件を解決する『聖騎士』の一人。そんな『聖騎士』達が集う組織がある名を『聖騎士団』、と。古来より存在し、魔を狩ることを生業とする存在。

リヴィアは聖騎士団に所属している人間で、日本に訪れたのは一匹の悪魔を討伐すると言つ目的があつてのこと。

それは超が付くほどの危険度が高く、過去に多くの聖騎士達が闘いを挑み、その分だけ命を落としている。それだけリヴィアが討伐しようとしている相手は危険であるといふことだ。

「ねえ、緋山くん」

ビルの中に入り中を散策している最中、不意にリヴィアが口を開く。

「これから闘う相手は、今まで闘つてきた相手とは訳が違います
「……だろうな」

リヴィアに言われるまでもなく、龍翔は理解していた。この廃墟へと足を踏み入れた途端、そこは正に異界が広がっていた。

明らかに違う外との空氣。廃墟そのものに異質な雰囲氣があるが、これはそれを軽く上回る。入った時点で本能が危険だと激しく警鐘を鳴らしている。

例えそれが何の力も持たない一般人であつたとしてもこの異様な空氣に当たられ体調不良を訴えるだろう。それぐらい、この廃墟は悪魔の持つ魔力によつて満ちていた。

リヴィアの言う通り、今回の相手は今までに對峙してきたどの魔よりも強い。どんな容姿なのか見えずとも、どれだけの力量なのか手合わせしなくとも、この廃墟内に満ちる魔力で強者であることは手に取るようわかる。

「……緋山くん、これも何度も言つていますけど貴方は聖騎士団の一員でもなければ魔力を持つていません。貴方は、一般人と変わりないんですよ?」

「だからつてさ、今更俺独りで帰れなんて言つなよ? 言われて

も帰らないけどな

「でも……」

「自分の身ぐらいは自分で護れる。それに、俺はある種普通じゃないから」

そう言つと、リヴィアは黙つた。

……緋山家は古来より剣術道場を當む家系である。

元は無名だったが戦国時代にとある合戦で武勲を立て、それが
切つ掛けに少しだけ有名になつたとされるとだけ薄つすら
と祖父より聞かされたのを覚えている。

本当はもつと詳しく、それこそ何時間と熱弁していたのだがそれを聞かされたのはうんと幼い頃。幼い子供にとって長話は退屈極まりないもの、だから襲つてくる睡魔と闘いながら必死に聞いているフリをしていたのは、今でも鮮明に憶えている。

眠つてしまえば、ちゃんと人の話を聞きなさいと祖父の拳骨が落ちてくる。それが嫌だつたから必死に欠伸を噛み殺し、真剣に緋山家について語る祖父の話を聞いているフリをし続けた。

緋山家の仕来りとして、当代となる者には剣術を指導し古来より伝わってきた技術を習得しなくてはいけない その仕来りは現代でも引き継がれてきている。

緋山家の跡取りとあるのは兄であり、弟である自分ではない。兄は幼少期より当時の当主 父より剣術の稽古を強いられていた。

五歳の頃より模造刀を持たされての剣術指導が始まつ。幼少期、遊び盛りの子供にとつてこの仕来りは地獄としか言いようがない。今にして思えば、理不尽な仕打ちを受けてきた兄がよく弟である俺に八つ当たりをしなかつたと思う。

泣きながら刀を握られ、父との稽古を強要させられている姿を何度も目撃している。

今をどう答えるかはわからない

だが当時の兄は剣術の修行、

そして父の事が嫌いだといつも泣きながら言っていた。

一方で、弟の俺はそこまで強要させられた無かつた。父も好きにすればいい、とだけしか言わなかつた。

強制ではなかつたが、自分自身の意思で剣術を習つていたとはいえ、正確に言えば祖父より超が付くほどの基本的なことしか教わつていない。

刀の握り方と振るい方、後は刀のメンテナンスぐらいだろう。後は適当な時間を見つけて父と兄の真似をして剣を振るつていただけに過ぎない。

別に苦ではなかつた。兄の様に厳しい修行をさせられていなかからかもしけないが、それでも兄と父と同じ様に剣を振るうのは楽しかつた。今でも充分意欲を持つて取り組んでいる。

そんな弟の俺の境遇は、兄の目からすれば嫉妬の対象だつた筈。だが兄は決してその事で怒りの矛先を向けてハツ当たりするようなことはせず、優しい兄として接してくれた。

だから今になつても兄の事は誇れる兄貴だと胸を張つて言える。そんな幼少期が終えてから数年の月日が経つた。

兄と俺は高校に進学。兄は家より、もとい父の言い付けで家より通える距離にある高校に入学した。兄自身もその学校に通いたいと口にしていたので、特に問題は無かつた。

一方で俺は当時より一人暮らしというものをしたかつたこともあり、家を……街を離れて他県へと移りその学校に入学することにした。偏差値的には兄が通う学校とほぼ同じ、特に父に反対されることもなくすんなりと一人暮らしをすることが出来た。

……思え、これが全ての始まりだったのかもしれない。己のトランガー
緋山龍翔の持つ運命の歯車を大きく狂わせるための引き金を

引いてしまつたのだと。

高校生活一年目のある日、龍翔は交通事故にあつた。

理由は至つてシンプル。車道に飛び出した子供を救う為に身を挺しただけ。結果子供は無事、代わりに身を挺した龍翔は重症を押し

生死の狭間を彷徨うこととなつた。

当時の医者は語る。手術をし成功するのはたつたの二パーセントだと。

誰が聞いてもその数値は絶望的だ。二パーセント助かる、と捉えればいいかもしだいが大半の人間は残りの二パーセントに絶望し悲観する。現にその話を聞かされた母は絶望のあまり毎日の様に号泣していた、と後に兄より聞かされる。

助からないことを前提に行われた緊急手術。失われた大量の血液を補う為の輸血、何十時間と言う手術、後は手術を担当する医師とスタッフの腕に賭ける以外になかった。

不思議な夢を見た。

荒れ果て大地、燃え盛る紅蓮の炎に包まれた何処かの街。構造物を見る限り、それは現代の物ではない。中世、騎士や城と言つたものがあつた時代を思わせる風景だつた。

その中に、一人の男が佇んでいた。否、あの姿を男として……人間として表現してはいけない。アレはそもそも人の形こそしているが、人間と言う種族カテゴリーに当て嵌まらない存在だ。

醜く、鋭い牙を持ち、強靭な肉体の持ち主。漆黒の中に奔る仄かな輝きを放つ赤いラインの肉体。背中には四対の一メートルはある大きな蝙蝠のような翼。

この姿から見て、其の男を人間として捉えられる訳がない。そう、アレは正真正銘の化物 悪魔だ。

そんな悪魔の腕には、一人の人間の女性が抱かれていた。白を主体とした衣装、そのデザインは風景が中世風である故にドレスを身上に纏っている。

その女性を片腕に抱く悪魔 その姿はとても優しく、まるで人間味を感じさせる。抱かれている女性もまるで愛する者を見る眼で悪魔を見つめ、聖母の様な優しい笑みを浮かべていた。遠くから、狼を思わせる遠吠えが聞こえてくる。それに伴ない、

陸、空、空間とあらゆる所から次々と異形の者達が姿を現した。

この怪物達も、あの女性を抱く者と同じ 悪魔なのだろう。

突如出現した無数の悪魔達は皆漆黒の悪魔へと向いている。

漆黒の悪魔が、腕に抱えていた女性を更に自身へと抱き寄せる、それは絶対に指一本すら触れさせまいと護るように。

刹那、聞いた事も無い、不快感と恐怖感を与える咆哮を上げ、無数の悪魔達に向かつて青い焰を放つた 夢はそこで終わり、現実へと強制送還される。

目が覚めて、龍翔の目に最初に映つたのは号泣する母。生まれて一度も見た事がない父が涙を流していた姿、そして同じく静かに泣き生還を心から喜んでくれている兄の姿だった。

二パーセントしかない生還率から見事生還し、医師たちはただただ奇跡としか言いようがないと口にしていた。

それから全治一ヶ月と診断されたが、リハビリを懸命に続けることでその半分で無事退院することが出来た。後遺症もなく、五体満足の状態でまた退屈ながらも楽しい学校生活と一人暮らしが始まる

この時から、運命の歯車は大きく狂つてしまっていた。

最初の異変に気付いたのは、学校に戻つてから直ぐのこと。

ある日、教師からの手伝いで花壇の手入れをしていた時だ。偶然、欠けていた植木鉢の指を切つてしまつた。

植木鉢は土や泥で汚れていた為、傷口を流水で洗い流してから保健室で絆創膏でも貰いに行こうとした が、流水から指を離すと何処にも傷はなかつた。

見間違え、などではない。確かに指を切つた痛みと、血が流れているのをこの目で見たのだから。しかし今はそんな傷など何処にもなく、結局見間違えだつたと自身に言い聞かせ、やがてはその事をすっかり忘れていった。

しかし異変はそれだけではなかつた。

まず最初に身体能力が大幅に上がつた。

百メートル走では七秒台と言つ世界記録を軽く超える、とんでも記録を叩き出した。今まで自転車通学をしていたが最近では走つて学校に行くようにしている、その方が早いからだ。

握力も百キロ以上出せるようになった。以前の記録は四十少し、一気に六十以上も跳ね上がつたのは自分自身でも驚きだ。

それに加え、どれだけの長距離走を走つても全く疲れない程の持久力を手に入れた。体育を担当する教師はプロを目指せと推され中、他の教員たちからは何があつたと心配され、両親からは病院に行つてみてはと言われる始末。

しかし病院に行く気は更々なかつた、自分自身が困つていなからだ。

特に身体能力が大きく向上しただけで、日常生活では何の支障もない。それに考えられる原因と言えば失われた血を補う為に輸血した第三者の血液ぐらいだろう。

輸血した後、若干性格などに変化が現れると言つ話を聞いたことがある。それは元の持ち主の血液が交じるからだそうだが、今回自分の場合は身体能力だろう。

元の持ち主はオリンピック選手か、或いはそれ並みの身体能力の持ち主だったから。そして俺もその血液が交じつたことでそうなつたとしか考えられない。

だとすれば治す方法などないだろう。一度混ざつてしまつた血液を元の二つに分解させることなど不可能だ。故に病院には行つていな

ただ、この能力を何に活かせばよいのか……それが悩みの種であつた。オリンピック選手を目指すつもりは毛頭ない、かと行つて活用しなくては宝の持ち腐れと言つもの。

どうするべきか、そう悩んでいた矢先にリヴィアとの出会いがあつた。

超人的な身体能力も、幼少期より学んできた剣術も、リヴィアとの出逢いがあつたことで意味を成したのだ。

ならば、意味を成したこれらを以つて彼女の力となる。彼女は決して望まないだろうが、これが自分が彼女に出来る礼だ。

「何とかなるつて。今までだつて、何とかなつてきたし」

階段を上りきる。目の前には扉、この扉の先は屋上が待つてゐる。

「こりや、凄いな……」

眩ぐ様に龍翔が言つ。

扉の向こうから放たれる魔力。発生源がその先にあるだけあり、濃度も建物内に比べればとてつもなく濃い。常人ならばこの魔力を当てられただけで絶命しかねない。

後戻りは、もう出来ない。以前にする氣など最初からない。

どんな相手であろうと斃す。リヴィアと二人ならば、如何なる強敵であろうと負けはしない。

リヴィアに視線を向ける。小さくリヴィアが頷き、龍翔は屋上へと続く扉を静かに開けた。

開かれる扉。降り頻る雨に濡れた屋上、そこに佇む一匹の異形の者の姿。

例えるならば、騎士という言葉が近いだろう。肩の突起物や肉体の形状は何處か中世の騎士が纏つっていた鎧を思わせる。それとは別に黒紫色のマントを靡かせていた。

「……何者だ？」

訛りのない滑らかな人語でそれは喋る。

「聖騎士団所属、リヴィア・ステイーガー……神の名において

黒騎士、貴方を討伐します！」

言つや否や、リヴィアは黄金の長い装飾槍　　ユステイティ

アを構え地を蹴る。伴ない黒騎士の手に大剣が現れる。身の丈以上のある赤黒い大剣、その形状は異形であるで大きな鉄の塊、剣そのものが魔物のようすら見える。正に悪魔の剣として相応しい代物。その大剣を構え、リヴィアが振るつた一撃を受け止める。

「ハアアアアアアツ！！！」

絶えず、鋭い穂先が連続して黒騎士に襲い掛かる。リヴィアが最

も得意とする技、目にも留まらぬ連続の突き。一秒間で十発という驚異的な速度を以つてして放たれ、その威力は分厚い鉄板であろうと豆腐の如く穿つ。第三者の視点からすればそれは一撃の突きとか視認出来ず、龍翔ですら辛うじてその突きを補足出来る程度。

それを、

「ふつ

黒騎士は一笑に伏し、リヴィアの繰り出す突き乃速だと同等の速度を以つて大剣を“片腕”で振るい全て弾き返した。

驚愕の表情を一瞬浮かべて、直ぐに冷静を取り戻した表情を浮かべたリヴィアはバックステップで黒騎士との間合いを空ける。僅かに遅れて、巨大な鉄の塊が横薙ぎに払われる。

冷や汗を流すリヴィア。それは龍翔も同じだつた。

相手はこれまでのとはレベルが違うことだけは理解していた。だがそれはあくまで予想していた強さであり、実際に目にする黒騎士の強さはその予想の強さより遙かに上回るものであった。

リヴィアの高速の突きを難なく、それもあれだけの巨大な剣を片腕で全て防いだ。それだけではない、リヴィアが激しく動いているにも関わらず、黒騎士はその場から一歩たりとも動いていない。

「どうした女、もう終わりか？」

「まだです！」

ユスティティが黄金の光に包まれる。

それは魔術の行使を告げる合図であり、リヴィアの中で最も最強とされる必滅の一撃。

槍を振るい、構え直してからの跳躍。上空へ高々と飛び上がったリヴィア、落下速度を利用し更に光の魔術を用いての一撃。

「デウス・イーラッ！！

唐竹に打ち落とされる一撃。

龍翔は知っている。リヴィアの技、デウス・イーラの威力を。今まで対峙してきた悪魔達は全てこの一撃にて葬り去られてきた。どんなに強固な肉体を持っていても、どんなに強力な魔力を持つて

いたとしても、この一撃に耐えられる悪魔は存在しなかつた。

だが

「 鮮血が飛び、光に包まれた黄金の装飾槍は黒騎士の片手の中に

素手によって受け止められ、反対の手に携えられていた大剣がリヴィアを切り裂いた。

人間死ぬ間際、世界がゆっくりと流れてくれるといつ。実際には一秒一秒といった瞬間的なものが、その本人にはその一秒が何十秒にも感じられるのだといつ。

ああ、正にこの事を言つのか。リヴィアは目の前の敵を見据えながら、そんなことをふと思つ。

油断していた。自分の技に絶対の自信を持つて繰り出したにも関わらず、相手はそれすらも超える力量で難なく受け止めた。レベルが違い過ぎる。

たつた二人で挑むべき相手ではなかつた。コレを滅するにはこそ中隊規模の聖騎士達で挑まなければ斃せない、否……それでも勝てるかわからない。

いざれにせよ、後悔するのはもう遅い。日本の諺に後悔先に立たず、という言葉がある。

トドメを刺さんと、黒騎士の大剣の刃が目前まで迫り、その背後より一振りの太刀を振り翳し、打ち落とさんとする青年の姿が視界に映つた。

一閃。縦一文字に振るわれた一撃は俊足の速さを以つて回避した黒騎士を捉えなかつた、が結果としてリヴィアの危機を救つた。

「ほう、普通の人間にしてはいい動きだ」

「そりやどーも。だが、コイツは殺させはしないぜ……黒騎士さん！」

黒騎士と対峙し、日本刀を中段に構えると龍翔は地を蹴り間合いを詰める。

彼が出す一歩は常人のそれを超える。魔術の行使をしない、出来

ない龍翔の一步は純粹な身体能力を以つてしてのこと。その純粹な力のみで出された一步は数メートルも離れていた黒騎士との間合いを零に縮めた。

短距離走の世界記録を軽く超える記録も本気ではない、龍翔自身にしてみれば駆け足同様の気持ちで走ったに過ぎない。
しかし一度普段制御している力を引き出せば、これぐらいの事は造作もなくなる。

「むつ！」

少しの驚愕の声に、赤き瞳が僅かに見開かれる。

龍翔の刀が切り下ろされる。

それを大剣の刀身が弾く。

なるほど、と黒騎士は何処か関心した声を出した。

魔術師でも聖騎士でも何でもない、何の力も持たない普通の人間がどうしてこの場にいるのか。先程聖騎士を葬り去ろうとし、それを阻止した時点で普通ではないと理解したが今の剣戟を受けたことで改めて実感させられた。

故に黒騎士は納得し、認識を改める。油断は逆に殺られるということ、そして手加減をすると言ひ行為は目の前の剣士に無礼であるということを。

「……私の名はクルティス。人間、貴様の名は何と言つ？」

「……龍翔、緋山龍翔だ！」

「よかろう。緋山龍翔、お前を私の障害として認め　　全力を以つて屠り去ろう！」

黒騎士の得物である大剣、その刀身に黒い炎が突如として燃え上がる。

黒い炎の正体　　それは悪魔の持つ力、即ち魔力。

全力で葬り去る、その言葉を確実に実行する為に遂に黒騎士が本気の力を出したという証。

放出される魔力は黒い炎の様に具象化され黒騎士の大剣で燃え上がる。

龍翔は一瞬にして空気が変わったのを肌で感じ取った。

言葉通り、相手は全力で挑んでくる。そして其の目、構える剣からは一撃で葬り去ると言う強い気が伝わってくる。

自分は何の力も持たない人間。リヴィアのように魔術を使えるわけでもない、所持している刀にも何か特別な力が宿っている訳でもない。

だが

「あつそう……！」

龍翔は地を蹴る。

逃げることもしない。小細工をすることもしない。

相手は真正面からぶつかってくる、ならば此方も真正面から全力で挑むだけ。これが普通の殺し合いなら、こんな綺麗事を言つていふ場合ではない。例え卑怯と罵声を浴びようとも、勝利を得る為ならば手段なぞ選んでいる場合ではないのだから。

しかし相手は悪魔である前に一人の騎士なのだ。

正々堂々とした振る舞い、ならばその騎士道精神に乗っかり武士道精神を以つて挑むのが相手に対する礼儀。龍翔はそう思った。

刀を上段に構え、一撃で決めると強く念じた思いを太刀に賭ける。剣士と騎士が動く。

轟、と空気が唸り、金属が圧し折れる音が響き渡る。

勝者はただ一人。

振り切られた刃、中ほどから圧し折られその先が宙に舞う刀身、横薙ぎに払われ右肩から左脇腹にかけて肉を切り裂かれた敗者がゆっくりと地に倒れた。

「緋山くん……んっ！……」

リヴィアの悲痛な叫び声が、雨の中に響き渡つた。

血を噴出しながら地に倒れる龍翔。そのままぴくりとも動かず、身体から流れ出る血が雨に混じり冷たいアスファルトの地面を流れていく。

「ひ、緋山くん！ しつかりして、緋山くん！！」

リヴィアが地に横たわる龍翔の下に駆け寄る。自身も重症を負っているにも関わらず、必死に声を掛け続ける。

しかし、その呼び掛けに龍翔は応じない。

眉一つ動かす事無く、降り頻る雨に打たれながら眠るように逝っていた。

「

容赦なく降り続く雨、その雨に全身を打たれている。

額からも雨が滝の様に流れていく。その中で、雨には無い冷たくも暖かな滴が瞳より流れた感触があつた。

「確かに身体能力の高さ、純粹な剣術の腕前は認めよう。だがお前は“人”だ、私や聖騎士の連中の様に力を有していない只の人間。ましてや、精霊の加護や魔術が施されていない得物で挑んだところで、我が身には届かん」

大剣を振るい、刀身に付いた敗者の血を飛ばし踵を返す黒騎士。

「ま、待ちなさい……！」

傷付いた身体に鞭を打ち、ユスティティアを構えるリヴィア。

「……やめておけ女。貴様では私に勝てない」

「それでも……緋山くんの仇だけは取らせてもらいます！」

「……理解出来んな。そこまで大切に思う者ならば、何故この戦場に立たせている。彼の者は何の力も有していない人間だ、貴様もそれを理解している筈」

「……初めて、心から大切な人だつて思えるからです」

リヴィアから魔力が放出される。

放出される魔力は暴風の様に吹き荒れ、空から降り頻る雨を吹き飛ばす。

「ツ！ なるほど……聖騎士でありながら何処か違和感があると思えば、そういうことか。貴様も私と同じと言つ訳か、女よ……！」

黒騎士が言う。

魔力放出によってリヴィアのブロンドの長髪が靡く。そこに隠されていた

通常の人間の耳とは違う、矛先のように尖った両

耳が晒された。

古来より、魔との関わりは禁忌であり神に対する暴君としてされてきた。

人々が魔に対する恐怖は絶対的なもの。有名なのは魔女狩りだろう
現代において科学と言う力が発展し多くの出来事が過ち
だと判明しているが、それでも当時の人々はそれぐらい魔と言う存
在に恐怖していた。

リヴィア・ステイーガーは普通の人間ではない。人間と魔の血に
持つ混血児だ。

何故人間と魔が結ばれたのか、その理由は今となつても知らない。
以前に親の顔すらもリヴィアは知らない。己が人間と魔の混血
児である、その事を知つたのは聖騎士団に拾われてから齡十を迎
たある日のこと。

成長して行くにつれて増大していく魔力。そして人間として普通
である形の耳が徐々に尖つっていく。

そして一人の同期からの一言でリヴィアは知つた。

お前は魔と人間の混血児、異端の存在だ。

自分には魔の血が流れている。この事実がどれだけリヴィアに衝
撃を与えたか、それは言うまでも無い。

魔を絶対魔とし、正義の存在として人々の為と闘つてきた人間
が。その絶対魔である魔の血を引いている。

リヴィアは全てを理解した。自分は最初から生きる選択権など与
えられていなかつたのだと。魔の血をこの身に宿している以上、
聖騎士団からすれば自分も魔同様魔の存在。今まで殺されずに要
るのは聖騎士団の一員として務め、死地に赴き闘い続け、そして貢
献してきたから。

もしこれらを破れば忽ち自分は魔の存在として認識され滅される。
怖い。幼少期のリヴィアにとつてこれほどまでに恐怖を感じたこ
とはない。だからリヴィアは必死に闘い続けた。聖騎士の一人とし

て、例え悪魔の血を流しているとしても“人”として悪魔と闘い続けると、そう深く呪詛のように魂に誓いを立てて。

どれだけ武勲を立て、聖騎士団に貢献したとしても、リヴィアを認めるものは現れない。悪魔だからそれだけ働いて当然、文句を言う権利はない、そう口にする輩も少なくはなかつた。

それでも、リヴィアは必死に闘い続けた。力を得るために死ぬ物狂いで修練し、悪魔を斃し続けた。

齡二十を迎えた頃、リヴィアの成長は止まつた。悪魔の血による作用、人間としての性能を超えさせるそれは戦闘において最も絶頂期である状態で肉体の加齢を止め、不老と言つ名の呪いとなつてリヴィアに降り掛かつた。

しかしリヴィアはそんな事など気にせず、聖騎士の一人として闘い続けた。

そして現代、人間換算し齡三百歳となつたある日の事。聖騎士団に所属した頃より内部構成も大きく変わつたが、リヴィアと言う存在を見る日は相変わらず。

そこで現騎士団長より使わされた命令により、日本という小さな島国に現れたという黒騎士を倒す為に留学生としてその地に赴き緋山龍翔と言う存在と出逢つた。

あれこれ声を掛けてくる男子生徒達とは違つ、不思議な雰囲気を放つ少年。

そしてある日の夜、田当ての悪魔を探しながらも日本に現れた悪魔と闘つている姿を目撃された。

「緋山くんは……私を恐れることはしなかつた。私が悪魔の血を引いているからと、軽蔑しなかつた。普通の人間として、友達として接してくれた……！」

時代が進むにつれて、人々が悪魔と言う存在に対する恐怖心を忘れ去つてしまつたからか。それとも緋山龍翔という存在自体が他の人間とは違う感覚の持ち主だからだろうか。

『悪魔の血を引いていようがいまいが、お前はお前だろ？ それ

に何かエルフの耳みたいな感じだし、カッコイイと思うぞ俺は。つーか凄いよな、悪魔と闘つてるつて』

決して嘘を吐いている訳でも、心にもない慰めの言葉でもない。本心からの言葉。かつて何百年と言う時を生きてきた中で初めてリヴィア・スティーガーと言う存在を見てくれた人間。

それから更に驚くことを口にする。一緒に戦わせて欲しい、と。彼曰く、毎日同じことの繰り返しより面白いし何分やりがいがある。勿論リヴィアは断つた。幾ら心が優しい少年だからと言って普通に人間であることに変わりない、ましてや闘う理由が不純すぎる。悪魔との闘いは娯楽ゲームではない、互いの命を賭けた殺し合いだ。

しかし龍翔はそれでも、としつこく言い続け 最終的には隠れて悪魔と戦うという、心底驚かせる行動に出た。何処で入手したのか、一振りの日本刀を手に悪魔と闘い、それを斃してしまった龍翔。

刀を振るい悪魔を斃す、その時の顔は恐怖ではなく まるで悪魔、憤怒の形相を浮かべいた。

後に龍翔は語る。緋山家は昔から剣術家であつたと同時に“鬼”的一族として畏れられてきた、と……。

それからもリヴィアは龍翔と共に行動することにした。最初はこれ以上無茶なことをしない為にと監視の意味合いで行動していくが、やがて時が経つにつれてかけがえの無いパートナーとして見るようになつた。

嬉しかった、共に行動し戦う仲間が出来たことが、楽しかった、何の躊躇いもなく接してくれる友人と過ごす時間が。そして 愛しかった、傍に居てくれる緋山龍翔と言う異性が……。

「……確かに、彼をこの世界に招き入れた私に責任はあります。ですが私は彼を愛している。だから、その想い人の仇を……この命に代えても討つ！」

「……ならば来るがよい。その命を燃やし、私を見事討ち取つて

疾風が発生した。それは直ぐに全てを吹き飛ばす暴風と化し、瞬く間に生ける者を穿ちその命を一瞬にして奪う雷と化す。

黒騎士とリヴィア、一人が眼にしているモノは全く同じ。しかし、両者は会話を交えた訳でもなく、同じ感想を述べていた。

“鬼”。

古来より日本に生息するとされる魔者 妖怪と呼ばれる存在。その中で鬼という存在は妖怪の中でも最も古くから存在するとされ、最強とも謳われる妖怪。

有名なのは『羅生門の鬼』や『酒呑童子』などが挙げられる。いずれも人間の手によって退治されたが、それでも猛威を振るい人々を齎かす存在であつたことは確かだ。

ある日興味本位から学校の図書室にて日本の魔物について調べてたりヴィアは、鬼という存在を眼にし、魔物と同等の脅威だと認識した。

魔物と魔物、一見すれば同じと思われがちだが性質は異なる。唯一共通している部分は魔界に生息している、ということぐらいだろう。

魔物とはこの人間界で言えば動物である。地を這う者、空を飛ぶ者、水の中を泳ぐ者……実に多様な魔物が存在している。

一方で魔物とは知能がとてつもなく高く、言語能力とコミュニケーション能力を持ち、そして超越した力を有している存在。彼らの位置を例えるのならば『人間』に当たる、がその性質は総じて凶暴かつ好戦的な者達ばかりだ。

人間界と魔界、二つの世界は異なる位置に存在しているが見えない壁によって隔離されているだけ。時に魔界の者達はこの壁を破り人間界に侵攻し、それを防がんと立ち上がる人間達 聖騎士団があつた。そうやって二つの世界は共存してきていたのだ。

しかし妖怪は違う。古来から既に人間界に生息し、その中で鬼という存在は長きに渡り人間達と激しい死闘を繰り広げてきた。これを脅威としてみる以外に他はない。

「グウウウウウウウツ！！！」

黒騎士に飛び掛り拳を振るつてるのは他の誰でもない。黒騎士に切り伏せられ横たわっていた緋山龍翔だ。

しかしその姿は人間でありながら、ヒトではない。

眼をカツ、とこれでもかと見開き、固く握り締めた拳を咄嗟に防いだ黒騎士の大剣の刃面に叩き付け、憤怒の形相を浮かべ、開かれたその口より見える犬歯はまるで牙のようにすら見えた。

膨大な魔力が放出する様は蒼き鬼火を燃え上がらせているかの如く。鬼の象徴物でもある角がないものの、その姿は正に日本に生息する妖怪

鬼を思わせる。

両者は目を見開き、龍翔の豹変振りに驚愕していた。

「貴様……この力、魔力！？ 貴様も私達と同類というワケか！？」

黒騎士が叫ぶ。

鬼の拳を受け止めている龍翔を力任せに弾き飛ばし、剣を構え直す。

荒々しく息を吐き、殺氣の籠つた瞳で見据えてくる龍翔を見据え返す。

「……やめだ」

不意に黒騎士は構えを解き、踵を返す。

「その小娘は兎も角として、ここで貴様ほどの男を殺すのは惜しい。まだ力を思うように操れていないとお前を斃したところで意味は無い。故に私は待つことにした」

黒騎士が空へと飛翔する。

数メートル程の位置にて浮遊し、見下ろしながら口を開く。

「魔の血を引く人間よ、力を身に付けるがいい。そして貴様が完全に私に勝てると、そう確信した時私はもう一度お前と全力で戦お

う。私は一年¹とにこの場所、同じ日時に現れる。それまで私はお前たち以外の者を殺さないことをここに誓おう。では、楽しみにしているぞ

！！

そう言い残し、^{クルティス}黒騎士は姿を消した。

静寂が訪れる。

魔力の放出が收まり、力なくその場に両膝を付く龍翔。

「大丈夫ですか！？ 緋山くん！！」

慌てて、リヴィアは駆け寄つてくる。

「…………」

突然、龍翔は握り締めた拳を地面に叩きつけた。

爪が肉に食い込み出血する程強く握り締めながら。何度も、何度も、血に濡れ赤く染まつた拳を容赦なく叩き付ける。

今までにないぐらいの悔しさが心の奥底から込み上がつてくる。

昔から父に言っていた言葉がある。

“緋山の剣を振るう者は如何なる相手であつても敗北してはならない”、と。

自分は正式な継承者ではないから、と言えばそこまでだ。しかしそれは弱い自分を保護するだけの言い訳でしかない。

当主の座を継ぐ者でなくとしても、緋山の剣を振るう者であることに変わりない。

そしてあの黒騎士に手も足も出ないまま負かされて、拳句の果てにこの命を生かされた。

リヴィアのパートナーとして闘つようになったのも、純粹に彼女を護りたいと思ったから。最初は興味と退屈凌ぎ、そして僅かながら女一人に危険なことはさせられないとカツコ付ける為だった。

しかしリヴィアと共に闘する内に護りたい存在として見るようになつていた。

友達と言う関係よりも、親友と言う関係よりも、とても大きく…深いもの。異性としてなのか、それは未だによくわからないがそ

れでもリヴィアの事が好きだった。

なのに……彼女を護ることが出来なかつた。最初に黒騎士と対峙した時、強さの違いに立ち向かうのに僅かながらも躊躇つた自分がいた結果、リヴィアは黒騎士の太刀を浴びることとなつた。

護る為に立ち向かうも、圧倒的な力の前に破れ地に倒れる。

薄つすらと失われていく意識、その中で聞こえてきたリヴィアの声。彼女の声は、悲しみしか含んでいなかつた。

刹那、何処からか声が聞こえる。薄れていく意識を田覓めさせ、沸々と闘志の焰を燃え上がらせてくれた何者かの声。

「護る為に戦え」 その一言で意識は完全に覚醒し更に自分自身でもよくわからない“何か”を田覓めさせた。使い方なんてものはわからない、ただ感情のままに……本能のままに動いたまでもしかし黒騎士を倒すことはおろか傷一つ付けることすら出来なかつた。

自分自身が許せない。悔しいという言葉以外思いつかない。同時に、強く思う

「 力が、欲しい！ 僕は、強く……なりたい！！」

天を見上げ、涙を流しながら力の限り叫んだ。

「強く……なりたい、か

不意に聞こえた声に振り返る。

そこには先程まで居なかつた筈の第三者。全身黒のスーツに身を包み、赤いネクタイを締め、紳士を思わせる長身の老人であつた。

「強くなりたいのかね？」 緋山龍翔君

「な、何者ですか……！！」

傷口を庇いながらも、龍翔を護るよつに立ちはだかりユスティニアの穂先を老人に向けるリヴィア。

老人はふむ、と言つた後優しい笑みを浮かべながらその質問に答えた。

「私は……悪魔だよ。君たちのように混血児などではなく、純粹な……」

「……クルティス、テメーは俺が必ず斃す」

拳を握り締め、自身に言い聞かせるように呟く。

不意に機内にアナウンスが流れる。それはもうすぐ空港に着くと言つ内容であった。

いよいよか、と外した視線をもう一度窓へと向ける。

見えてくる滑走路、大きな空港、そして日本……。

久し振りに踏む日本の大地、六年間程離れていた日本は……生まれ故郷はどう変わっているのだろう。或いは何も変わっていないのか。

そんな思いを胸に、静かに飛行機が着陸するのを待つた。

久し振りに踏んだ日本の地。やはり生まれ故郷と言つのは悪くない。

実家に戻り父と母、そして緋山家当主となつた兄と再会し世間話をして、久し振りに懐かしの我が家で楽しい時間を過ごした。数年ぶりに食べた母の料理に思わず涙を流してしまうこともあつた。

翌日には早朝から新幹線に乗り、東京へと向かう。

今の緋山龍翔と言う存在を作つた始まりの地。そして今日がその運命の日。

東京に着くと夜まで近くのカプセルホテルで身体を休める。何事も体調は万全に、万全でない時に挑んでも勝ち目などない。

「……」

携帯電話を取り出し、折り畳まれたディスプレイを開く。

今日の日付 十二月十五日。あの日から四年、死に物狂いで修行をしてきた。全てはあのクルティスを斃す為のリベンジ。そうして時間は過ぎ去り、遂にその時が訪れる。

午後十一時過ぎ。午後から天候が崩れ出し、今では大雨が降つて
いる。

昨日までは青かつた空も今ではすっかり暗雲に覆われてしまい、
地上に冷たい雨を降らし体温を奪おうとしている。

そして田の前に聳え立つのはこれから殺し合いの舞台となる一軒
の廃墟。四年経つた今でもこの場所に、当時の姿のまま残されてい
るのはある種奇蹟と言えよう。

……あの時と全く同じシチュエーション。強いて一つ違いを挙げ
るとするならば、パートナーであるリヴィア・ステイーガーの姿が
ないことだ。

彼女には連絡していない。黒騎士クルティスを斃す時は絶対に一
人で、と約束を交わしている。だが その約束をあえて破つ
た、最初から破るつもりでいた。

これは俺自身の戦いだ。彼女を護れなかつたことに対する、その
ケジメを着ける。

廃墟の中に足を踏み入れる。

中も四年前と同じまま、この建物内を満たす魔力も。
階段を一段、また一段と上がっていく。目指すは屋上、ヤツが待
ち構えているあの場所へ……。

屋上に辿り着く。扉の先から放たれる濃厚な魔力。それは間違い
なく黒騎士の物。

深呼吸をし、ゆっくりとドアノブに手を掛け これから戦
場と言う名の舞台と化す屋上へと続くドアを開いた。

ドアを開いたその先、見慣れた背中があつた。

背中を向けるソイツは雨が降り頻る空を見上げて佇んでいた。

「よお、来たぜ」

声を掛ける。

「来たか。あの時を再現するかのよつだ……」

ゆつくりと、ソイツは振り返る。

四年経つてもあの時と同じ姿。騎士を思わせる身体、右手に携え

られているのは愛用の得物である鉄塊のような赤黒い刀身の大剣。

黒騎士クルティスと遂に対峙した。

「四年、か。私の予想では、まだ後五年程の月日が必要と思つていたが……」

「お前にリベンジする為に死に物狂いで修行してきたんだ。そんなに時間を掛けられるかよ」

龍翔の右手に一振りの太刀が姿を現す。

光沢のある黒い鞘、太極門の形の鍔、白の柄巻に鬼の顔を彫った黄金の柄頭。

その太刀の柄に握り、ゆっくりと鞘から払う。

「ふつ。では見せてもらおうか。貴様が四年間死に物狂いで修行をし、そこで得た力を

「上等……！」

四年の時を経て、剣士と黒騎士は再び合間見えた。

地を駆り、間合いを詰め、そして己の得物を振るつ。

振るわれた刃は空を切り裂き獲物の肉を斬らんと奔る。それを阻止せんと刃が同じく空を切り進み向かい来る敵を迎撃つ。

激突し合う二つの刃。火花が激しく飛び散り、雨音すらも搔き消す金属音が屋上に響き渡つた。

「ほう、確かに私に挑むだけあり、相応の力を得てているようだ。それに剣の方も普通の剣ではないらしい」

「剣じやねえつつーの、刀って言え刀って。お前に言われたとおり、超特注品を用意したつもりだ。これが俺の新しい相棒

鬼焰万净きえんぱんじょう！」

鍔迫り合いをしている龍翔の太刀、その刀身より青い焰が帯びる。轟々と燃え上がる青い焰はまるで意思を持つ生物の様に動きクロテイスに向かつてその牙を剥いた。

鍔迫り合いの状態から離脱。後方に飛び間合いを空ける。僅かに遅れて、飛び退く一瞬の間までクロティスの立っていた地点に青い焰が着火し、極太の火柱となつて天に向かつて燃え上がつた。

「青き炎……」

「勘違いするなよ。これは俺自身の力じゃない、あくまでこの刀本来が持つ能力を使つたまでに過ぎない」

「…………」

「気になるか？この青い焰……。お前が思つてゐる通り、この焰は只の焰じやない。まあ魔界出身者であるお前の方が、俺なんかよりもずっと詳しいんじやねーのか？」

龍翔の言葉にクロティスは口を開ざし、ただただ燃え上がる青い焰柱を見つめる。

……魔界とは人間界の様に規則という概念が存在しない、無秩序の世界。

魔界に住む者は皆好戦的な性格の持ち主ばかり。故に古来より魔界を支配する王にならんと日々争いが現在進行形で起こっている。だが一度だけ、一瞬だけ魔界に王が君臨した時代があつた。

それは伝説の悪魔、名をタフリール。何処で、何時生まれたのかも、どこからやつてきたのかもわからない悪魔。青色という極めて珍しい火の魔力ちからを有する彼はたつた一夜にして王候補ともまで呼ばれた悪魔達を次々と葬り去り、そして王の座に着く筈はずだった。

タフリールは王の座に着くことはなく、忽然と魔界から姿を消した。何の前触れもなく、誰かに言う事もせず、煙の様に……。

誰かに暗殺された、更なる強敵と闘いを求めて彷徨い旅立つた、などと噂が飛び交う。果たしてどうなつたのか、その真実を知る者は誰一人として存在しない。まして、生まれて極めて若いクロティスには尚更の事だ。タフリールが現れ王となり姿を消したのは今より五百年以上も前の話なのだから。

青い焰、実際に目にるのは初めてとなる。本当であれ偽者であれ、あの焰からは確かに悪魔の持つ魔力を感じる。信じがたい話ではある、が事実なのだろう。

どんなカラクリが施されているにせよ、あの劍……刀にはタフリ

ールの魔力を行使出来る魔具だ。一夜にして闘いを終結させた魔王、その力が込められた刀……危険極まりないのは明確済み。それを得物とし己の身体の様に操る緋山龍翔という存在も。

「それじゃ、そろそろ本番と行こうか。見せてやるよ、俺自身の『力』をな……ッ！」

龍翔が鬼焰万净を振るう。それは間合いに入つていらない状態での斬撃。数メートルも離れている距離で刀を振ったところでその刃が相手に届くことはない。

だがその斬撃は斬る為の物ではなく、作る為の物であるとクロティスは気付く。

「これは……結界か！？」

四メートル立方程の見えない壁によつて閉じ込められたクロティス。間髪いれず龍翔が唐竹に鬼焰万浄を打ち落とした。

結界内に刃が出現する。魔力によつて形成され焰の様に揺らめく

三田月状の刃が
龍翔の刀を振るつた軌跡は微いクロテノノ目掛け
襲い掛かる。

一なる限り敵の動きを封じるに攻撃を当てる、か。だが、この程度の技を共用マークでやる！

クロティスは大剣を振るい魔力刃

見当違いの場所へと向かつて空を切り進む魔力刃。そのまま結界の壁に直撃し

何!?

クロティスは驚愕の声を挙げる。

した、一つの魔力刃となつて。

壁に反射し二つに増えた魔力刃は再びクロティスへと襲い掛かる。またも大剣を振るう。今度は弾き飛ばすなんてことはしない、魔力刃そのものを消滅させるつもりで剣を振るつた。

しかしまたも結果は同じ。魔力刃は大剣に弾かれただけで消滅せず壁に反射し、今度は四つの刃と成りて再襲した。

悪魔達の力は多様だ。火の魔力を有する悪魔もいれば、水の魔力を有する悪魔も存在する。その中で龍翔の魔力は魔界にはない、極めて珍しい力であった。

『結界』……外部との接触を遮断する空間の意味する。その効果は様々で対象の動きを封じるものもあれば、身体に異常を起こさせるものも存在する。

四年前より悪魔、サタンの元で修行をし自在に使いこなせるようになつた力。

一の太刀で結界を形成し対象を隔離し、二の太刀で結界内に魔力刃を発生させ対象へと斬りかかる。結界内で発生させた魔力刃は壁に反射することで増幅を繰り返し対象へと襲い掛かる。

無限増幅と無限反射、隔離した対象が力尽き倒れるまでその力は消えない。「鬼哭啾啾」、これが緋山龍翔の魔力なのだ。

「ぐつ……おおおおおおおつ！！」

五体を切り刻まれていくクロティスが獸の如き咆哮を上げた。刀身より燃え上がるようにして放出される黒き魔力。

一振り、黒炎と言う魔力を纏わせた大剣を力任せに薙ぎ払う。その一撃は反射し続け獲物の肉を切り刻み続ける魔力刃を、閉じ込めている結界を一瞬にして破壊した。

「ハア……ハア……」

肩で息をしながら剣を構え、クロティスは龍翔を見据える。

なんなんだ、コイツは。そんな疑問を抱かざるを得なかつた。

伝説の悪魔、タフリールの青い焰の魔力を有する刀を持ち、加えて強大な魔力を兼ね備えている混血児。

人間と悪魔、この二つの種族が交配することで子供を成す事が出来ないことはない。しかし結果は一つに一つ、悪魔の血が濃ければその姿は醜態であり、逆に人間の血が濃ければ人間としての姿ではあるものの悪魔の持つ魔力は極めて弱小な物となってしまう。

四年前に闘つたその混血児でありながら聖騎士でもある女はどちらかと言えば悪魔側の血が濃い。耳は完全に悪魔としての物だが、

あそこまでキレイな人としての形であるのはある種奇蹟と言えよう。

だが、目の前の男はどうか？

その姿は完全に人間の物でありながら、自分を超える強大な魔力を保有している。数百年間、今まで数多くの悪魔や魔物、聖騎士イレギュラーと闘いを繰り広げてきた中でも緋山龍翔と言つ存在は完全な異質者。故に、相手に問うしかない。

「貴様は……本当に何者なのだ？」

「何者って言われても答えは一つ。俺は緋山龍翔、それだけだ。それ以上でもそれ以下でもない！」

そうとだけ答え、龍翔は鬼焰万净を正眼に構えた。

……自分の中には悪魔の血が流れている。人間と人間との間に生まれた子供は紛れもない人としての子供。なのに何故悪魔の血ちからを持つているのか。

四年前、あの日に出逢つた一人の悪魔……サタン。その口から語られたのは驚愕の事実。

事の始まりは高校一年生に巻き込まれた交通事故。失われた血を補う為に施された輸血、その血こそが伝説の悪魔と言られたタフリールの物であつたのだ。

“条件付”で修行の面倒を見てくれたサタンは言つ。第三者が悪魔の血を取り入れた場合、肉体が悪魔の力に付いていけず内部崩壊を起こす。しかし内部崩壊を起こさないばかりか、完璧に自分の物へと作り直してしまるのは緋山という特殊な血が流れているからであろう、と。

緋山家は鬼の一族と畏れられていた。鬼と言つのは妖怪としての意味合いではなく、あくまで比喩表現に過ぎない。

緋山の血族は生まれ持つての戦闘一族。緋山家初代当主という存在が生まれてきた時既に、その身体は戦う為だけに造られていたのだ。

人体の身体能力が三割程しか引き出せていない、という話がある。

それは脳が勝手に本来の力を発揮出来ないよう^ににその者の意思とは無関係に自動制御^{オートロック}しているからだ。

もし、仮に百パーセント……本来の身体能力を引き出せた場合、その途端肉体はその負担に耐え切れず崩壊を引き起こしてしま^{うだ}る。

そんな緋山家はその本来の身体能力を引き出すことが出来る血族である。生まれた時からそれに耐え切れるだけの肉体があるからこそ可能である業。

しかし それは心を殺す事も意味しているのだ。

本来の力を引き出す、それは言い換れば思考・肉体を戦闘用として切り替えるということ。余計な邪念を一切捨て、憤怒の形相を浮かべ殺戮機械^{キリングマシン}と化し敵と認識した対象を殲滅するまで闘い続ける。第三者の視点からすれば、そんな緋山家はまさしく鬼だろう。悪鬼羅刹の如く戦場で敵を屠り続けるその姿は全ての人間に恐怖を植え付けさせる。故に鬼と呼び、畏れ、脅威と見做す。

現代で薄れていると言えども人々より畏れられた緋山の血、そして伝説とも謳われた悪魔の血。この二つの血が混ざり合つたことで生んだ奇蹟（異常）、新たなる鬼神 緋山龍翔の誕生であつた。

「ふつ……ふふふ……」

黒騎士は笑う。身体を小刻みに震わせ、ゆつくりと大剣を構える。

「いい、いいぞ緋山龍翔！ まさか貴様が私が追い求めていた相手とはな！」

叫び、地を蹴り大剣を振り下ろす。

今までにないぐらいの高揚感が襲つていて。強者と出会えたことに心が踊り、もつと闘えと魂が叫び続けている。それに抗う事無く、黒騎士は剣を振るい続けた。

「はつ！」

鬼焰万浄を振るいクロティスを迎撃つ。

一つの刃が交じり合う。それは何合、何十合、何百合と瞬く間に

その数を増やしていく。

観客一人居ない舞台。そこで美しき殺戮の剣舞を繰り広げる二人の役者。

それは魅せる程の物がある が決して二人は魅せる為に剣を振るつてはいない。

黒騎士は強者と出逢い剣を交えられることに対する喜び、そして目の前の敵を斃せと騒ぎ続ける魂の震えを抑える為に剣を振るつ。剣士は友の敵を討つべく、一人の男との交わした誓いを守るべく、そして己自身絶対に負けるなど魂の焰を燃え上がらせて刀を振るつた。

「ああああああああつ！！」
「おらああああああつ！！」

剣士は、黒騎士は剣を振るい続ける。その身に刃が掠り肉が切り裂かれようとも、決してその手を休めることはなく。その身が血で赤く染まろうとも笑みを浮かべ続け、それは楽しそうに闘っていた。遂に千合に達した 長きに渡る死闘に終わりが訪れる。

龍翔の振るつた一撃がクロティスを完璧に捉えた。袈裟に振り下ろされた鬼焰万浄、その刃が黒騎士の肉体を断ち鮮血を噴出させた。誰が見てもその傷は致命傷。そして案の定、クロティスは剣を振るう手を止めその場に片膝を着き、倒れた。

剣士と黒騎士に演じた剣舞は終わり、終焉の幕をここに下ろした。

劇が終わり、観客達が会場を後にした舞台のよう。しんと静まり返る廃墟の屋上。

雨の降り頻る音だけが唯一の音。その雨に打たれながら見下ろす剣士と、その雨に打たれながら地上へと落ちてくる雨を見つめる黒騎士。

「……何故、トドメを刺さない」
「刺す必要がないからだ。別に俺は聖騎士でも何でもないからな」
鬼焰万浄を鞘へと收め、龍翔は答える。

この闘いの目的はあくまで黒騎士クロティスを斃すこと。決してその命を奪うことではない。元々殺すつもりなど毛頭ないが、サタンとの条件が大きく関わっている。

「一応教えておいてやるよ。四年前のあの日、俺に魔力の使い方を教えてくれたのは……サタンと言ひながら前の悪魔、つまりお前の親父さんだよ」

「なつ…………！」

驚愕し、傷付いた身体を動かし身体を起こそうとするクロティス。そんな様子を見つめながら、龍翔は続けて言葉を発する。

「お前のこと、親父さんに聞かせてもらつたぜ。魔界でもこの人間界でも強いヤツを求めて喧嘩を売りブッ倒しているつてな」

「…………」

「……そこまでして強さを求めて、強いヤツと闘つて勝つて、勝ち続けて……その後に一体何が残る？ 虚しさだけだよ、そんなモノは」

「……私は悪魔だ。悪魔である以上、闘いこそが全て……力を欲し求めることが生き甲斐なのだ」

静かな口調でクロティスは言つ。

強者を求め闘い、力を身に着け、更に闘い続ける。そんな生き方し続けてどれだけの歳月が流れただろう。

力ある者こそが生き、認められていく。力なき者は死に、嘲笑われる。弱肉強食の世界、それが魔界の本質。

強き者になる、そう決意し闘い続けてきた。力を求め、そして遂には魔界の王として君臨した。支配者となり、多くの部下達を従え、頂点に立つたのだ。

……だが魔界の王と言つてもそれは一部分での話でしかない。魔界は広い、そして強き悪魔達も数多く存在している。そして自分以外にも魔王を名乗る悪魔達も。

それでは足りない。田舎の支配者になつた所でそれは真の王とは言えない、魔界全域を支配してこそ真の王と呼べる。魔界の王はた

だ一人、自分でいい。

クロティスは配下達に玉座を預け、更なる強敵と闘い強さを得る為に旅立つた。

そこで緋山龍翔という存在と出逢い、今に至る。

「……緋山龍翔よ、貴様に一つ尋ねたい」

クロティスは疑問を抱いていた。

四年前までは弱者であった存在が、今逆に自分を打ち負かすほど強さを得て戻ってきた。故に黒騎士は問う、四年間どの様な修練を積み力を得たのかと。

「あ、強さね。俺も実際の所はよくわかつていらないんだ。けどよ、一つだけハツキリと言い切れることがある」

くさい台詞になるがな、と何処か照れ臭そうに剣士は言つ。

先程まで殺し合いをしていたと言うのにそんな態度がすぐ取れることがある意味凄いと思いながら、教えてくれ、と黒騎士は返す。

「……お前は最初は親父達の為に強くなつて魔界の王になる、そう決意して家を飛び出した。が、いつの間にかお前は目標を見失つてしまつた。お前はただ強敵との戦いと強さを得る為だけを執着するようになつてしまつた」

「……ッ！」

「目標を見失つた時点で、お前の強さはそこで終わつてしまつたんだよ。お前が得てきた強さは所詮見せかけ。もう一度思い出せ、お前はなんの為に力を身に付け、剣を振るつてきた？」

「……私は」

龍翔の言葉で蘇つてくる記憶。力を求める事、強者との闘いばかりを考え、気が付かぬ間に記憶の片隅へと忘れ去られていた懐かしい記憶。

「……そうだ。私は」

サタンは魔界の住人でありながら、その悪魔としての本質である戦闘本能を殆ど持たない悪魔であった。そんな彼は魔界に

迷い込んだ一人の女性と出逢い、一人の子を産んだ。それが黒騎士クロティスであるラプロなのだ。

異端者としての冤罪を掛けられた母は魔界でサタンと生きることを選んだ。サタンもまた最愛の人を護り続けるべく、己の為ではなく愛する者の為にその力を振るつた。

そして魔界で十年の歳月を過ごし、サタンは妻と娘を連れて魔界を捨て去り人間界へと移り住んだ。十年の歳月も経てばほどぼりも冷める、それに人間である母に魔界という環境は適応しない、そう考えての行動であった。

そして母の故郷であるイギリス、その田舎地方の片隅でひつそりと暮らすようになつた。

幸いにも、ラプロは悪魔の血を濃く継ぎながらその容姿は人間として強く形を残していた。強いて言えば、翡翠色と紫色のオッドアイであることぐらいだろう。

人間界で安心した生活を送れる、その事にサタンと妻は喜んでいた。だが一人、ラプロだけは納得しなかつた。

人間の姿をしていると言つても、やはりその身には悪魔の血が流れるからであろうか。ラプロは父の取つた行動に不満の声を挙げた。

サタンの強さは娘である自分がよく知つていて、一度腕が振るわれば忽ち辺りは焰の海と化し全てを焼き尽くす程の魔力を有している。

それこそ伝説とも言われる謎多き悪魔、タフリールと同等か或いはそれ以上だろう。なのに何故その力を振るわず、人間界で住むなどと言う愚行を犯したのか。

確かに母は何の力も持たない人間の女性だ、故に魔界という場所は危険極まりない場所なのは間違いないし素直に認める。

だが危険なのは人間界も同じだ。現に母は異端者としての無実の罪を着せられ追われていた。加えてこの人間界に攻め込んでくる悪魔達もいる。もし父が不在の時を狙われ襲われたりでもしたら、普

通の人間である母は間違いなく殺されてしまつ。

ならば人間界に移り住むなどと言つ事をせず、魔界の王となり君臨すればそれでいいのではないか？

魔界を支配する存在ともなれば、誰も父に歯向かう物は現れない。人間達の力では魔界へと侵攻することも不可能。そして魔界を住みよい環境にしていけば母も安心して暮らしていける。

父ならば魔界の王になることなど容易い筈、なのに何故……。

ラプロは何度も父に講義した。しかしサタンの答えは変わらない、人間として魔界を捨てこの人間界で妻と倉して行く、そう決意の籠つた声で答える。

そして、ラプロは両親の制止を振り切り自力で魔界へと赴いた。父が王の座に着かないのならば自分が王となろう、そうすれば父も納得し母も安心して暮らせる。

そう決意しラプロはクロティスと詐つ偽名を名乗り魔界で強さを求めた。

「確かにお前は悪魔の血を引いている、闘うことが好きだつたり力を求めたりすることも認めるし否定はしない。けどお前の中には人間としての血も流れている、だからお前も最初は親父さんとお袋さんの為に誰にも負けない力を身に付けて強くなろうとしたんじゃないのか？」

「…………ッ！」

「…………俺も前から疑問を持つてたんだ。悪魔の力を身に付けて、この力を何の為に生かせばいいんだろうなってな。そんな時にアイツやお前達悪魔と出逢つた。そこでようやく見出せた疑問の答え最初は俺もゲーム感覚で闘つてただけだつた。毎日同じことを繰り返す退屈を紛らわせる為の刺激、そしてゲームに出てくる主人公気分で敵を倒す。けどさ、あいつと一緒に闘つてる内に本氣で護つてやりたいって思つたんだ」

頬を搔きながら、またも照れ臭そうに話す龍翔。

「まあ、つまりその……なんだ。誰かを、大切なものを護る為に

闘う方がカツコいいし、力も生かせられるだろ？ それにな、タフリールだって人間の女性の為に戦つてたんだぞ

「何！？ そんな馬鹿な！」

「事実だよ。その証拠は、俺の中に流れる血が見せてくれた」

高校二年生の時に起きた事故。輸血が施され、緊急手術が行われている最中龍翔が見た不思議な夢。その夢に出てくる悪魔こそが伝説と謳われた青焰の魔力を有する悪魔、タフリールであった。

タフリールは一人の人間の女性と恋に落ち、魔界を捨てて愛する者の為にその力を振るつたのだ。数多の追手を焼き払い、愛する者を腕に抱き護る為に闘い続けた。

そうして一人の間に生まれた子孫が、何年もの歳月を得て瀕死の重傷を負つた身体に輸血されたのだ。

タフリールが魔界の王となる前の時代。唯一その生涯を知り、友と言つ関係でもあつたサタンからの証言もある。タフリールは一人の女性の為に魔界を捨てて護る為に闘い続けていた。そんな姿に憧れ、自分も大切な者を護る為にこの力を振るおうと誓つたともサタンは口にしていた。

「お前の親父さんも愛する人の為に闘つて、決して自分の欲を満たす為に力を振るわなかつた。サタンもタフリールと同じだな」

「…………」

「…………とりあえず、一度お前は親父さんの所に帰れ。そしてお袋さんのお墓参りに行け。今のお前があるのは両親と言う存在があつてからこそだ。自分の生みの親大切にしないヤツだけには絶対にないなよ」

踵を返しその場から立ち去る。屋上を去る直前まで、ラブロは口を開くことはなかつた。

「後はアソブ次第だな」

廃墟を後にし、一度振り返りながら呟く。

サタンが提示した修行の条件。それは娘であるラブロを必ず生か

した状態で倒してほしい、ということ。

全ては娘の身を案ずる父の願い。力だけを求める闘い続けていてはいずれ身を滅ぼす、それを防ぐ為には一度負かさなくてはならない。だが自分は年老い娘は全盛期の頃から見てもそれを超す程の実力を身に付けている。

自分では勝てない。そこでサタンが眼を付けたのが俺だった。旧友の血を引く存在。そこに見出した僅かながらも希望と言つ名の光。サタンはその光に、俺に全てを賭けた。

「……まあ、とりあえずこれにて一件落着つてところかな」

「いいえ、残念ながらそうはいきませんよ緋山くん」

前方から聞こえてきた女性の声に視線を向ける。

……見知った顔。聖騎士団の衣装を身に纏い、黄金の装飾長槍のユスティティアを携え、笑顔を浮かべているが口元は引き攣つている。つまり彼女は物凄く怒っているということを意味していた。

「……あ～、その、なんだ。久し振りだな」

「久し振りだな、じゃありません!! 約束を破り一人で黒騎士と闘うなんて一体どういうつもりですか!!」

怒鳴るリヴィア、その目頭には涙すら浮かべていた。

「いいじゃねーか、別に。俺はお前に傷付いて欲しくなかつたんだよ。それに……これは男と男の交わした魂の誓いだ、だから俺一人で闘つたまでに過ぎない」

リヴィアの頭をそつと撫でる。リヴィアが怒った時頭を撫でると猫の様に目を細めて大人しくなる。それは四年経つた今でも変わっていない。

「……心配したんですからね」

「悪かつたつて。そう怒るなよ」

「怒ります！ 私だって……ずっと緋山くんに逢いたい気持ちで一杯一杯だつたんですよ！？」

「だから悪かつたつて。とりあえず今日はもう遅いしました明日な

明日は四年ぶりの再会を祝して何か美味しいモンでも食いに行こう、

はい決定！

「あつ！ まだ話は終わって……つて速いつ！」

そそくさとリヴィアから逃げる。今日は流石に疲れた、ゆっくりと帰つて休みたい。

いつの間にか雨は止み、暗雲が晴れ、覆われていた夜空が顔を見せる。そこに浮かぶ白い月が神々しく輝きを放ち地上を照らしていった。

イギリスの田舎地方。広大な草原、山や木々が生い茂る縁豊かな地。

吹く風は心地良く優しく肌を撫でる。そんな風に銀色の長髪を靡かせながら、一人の少女は小さな墓石の前に佇んでいた。

一目に付かないような場所。そこにポツンと立てられた小さいながらも立派な墓石、そこに刻まれている文字は少女がよく知っている名前であった。

「帰つて來たか」

一人の老紳士が背後より現れる。その声に少女は振り返ることはせず、そのまま口を開く。

「……ええ、ただいま戻りました」

「…………」これを

少女の隣に立ち、老紳士はポケットから一つのアミュレットを取り出す。綺麗なルビーの宝石が填め込まれたアミュレット、それを少女へとそつと手渡した。

「それは私の妻が持つていたものだよ。自分の娘が愛すべき者と出会えた時に渡そつと大切に持つっていた

「…………」

「身に付けるとい。その方が妻も……“母さん”もきっと喜んでくれる」

少女は手渡されたアミコレットを暫く見つめ、ゆっくりと首から提げた。似合つてゐるよ、と老紳士は優しい口調で言つ。

「……ただいま戻りました」

手にしていた花束をそつと墓石の前に置く。

「私は数多くの敵と闘い、勝ち続け、力を得て来ました……」

墓石に語りかけるように少女は言つ。墓石から勿論返答はない、それでも少女は話しかけ続けた。

不意に少女の声が震える。オッドアイの瞳から一筋の涙が零れ、頬を伝つて地面へと流れ落する。

「「めん……なさい。お母様……帰つてこなくて……」「めんなさい……」

決壊したダムの如く、綺麗な瞳から絶えず零れ落ちていく涙。少女はその場に膝を着き、涙を流しながらただ謝り続けた。

「お前はこれから、どうするつもりだ？　また力を、強者を求める旅立つか？」

老紳士が尋ねる。泣き止み、涙を拭いながら少女はハツキリとした口調でその問いに答える。

「……私は悪魔、闘いこそが全てで力を求めるのが生き甲斐です。ですが……その力を、誰かを護れる為に振るいたいと、今は思います」

優しい笑みを浮かべて、決意の籠つた声で少女は言つた。その言葉に老紳士は何処か満足したように口元を緩めて頷く。

「そうか。お前がそう決めたのなら、私はとやかく言つつもりはない。母さんもその方が喜んでくれるだろう」

「……母は、出来の悪い娘を許してくれるでしょうか？」

「勿論だよ。お前が去つてからもいつもお前の身を案じていた。死ぬ前にお前が夫として認めた者とその子供の顔を見れないことが残念だ、と口にしていたがね」

「……そう、ですか」

何処か照れ臭そうに、それでも嬉しそうに笑みを浮かべる少女。墓石に向かつて小さく数多を下げる後、少女は踵を返しその場から立ち去ろうとする。

「……行くのか？」

「ええ。母がそう遺言を残しているのなら、私はその遺言に従つまでです」

「彼の、所に行くのか？」

「……あの人間のことは、まだまだ知らない事が多すぎる。だから少しでも彼の事を知つておきたい、それだけです」

「……またいつでも帰つて来い、ラブロ」

「……はい！ お父様」

fin

(後書き)

どうも、夢幻遊戯です。活動報告にもありますように、一時期マジで何もかも投げ出してしまおうか、と思つていきました。ですがやっぱり、これからも頑張つて続けて生きたいと思います。出来は相変わらずですが、これからも読んで頂ければ嬉しいです。それでは久し振りに……すわっ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5778z/>

Diabolus historia

2011年12月19日10時50分発行